衣生活に関連したモノ作りを通して、家庭科の教材化を考える

家庭専攻生
平田 陽子、池本 佳織、出水 加奈子、矢野　梓、河合 沙織
望月 春加、山田 ゆかり、曽我部 佳奈、高橋 美帆

指導教員
今村 律子（教育学部）

１．はじめに

わたしたちの活動は、2003 年 10 月に「こどもまつり」の「学びの企画」に出展したことから始まった。「こどもまつり」は、和歌山大学大学祭の一環として開催されているものであり、こどもたちになじみのうすい大学における「学びの場」を提供する試みをおこなっている場である。「学び」の内容としては、家庭科の衣生活領域を取り上げ、①衣服への関心を高め、②生活に役立つ物を製作することに取り組んだ[1)]。2 年目の 2004 年からは、自主演習の単位にすることが可能となったので、前年度よりも学生主体の活動となるよう、計画段階から自分たちで考えることにした。その結果、製作品のうちのひとつを、指編みの作品から牛乳パックを利用した編み機で作るあみぐるみへと変更することにした。また、実施方法などにも改良を加え、スムーズな運営を心掛け、一定の成果を挙げることが出来たと考える[2)]。しかし、「学びの企画」は参加者のこどもたちが学ぶというよりは、主催者側のわたしたちが、こどもたちへ教えるという活動を通して、こどもへの接し方や「教える」ということなどを学ぶというところに留まった感がある。

今回は 3 年目の活動となり、前年度までに不十分であった「学びの企画」を中心的な課題とし、さらに検討して発展させることにした。本活動における「学び」の内容は、当初から「ものづくりを通して、織物と編物という構造の異なった 2 種類の布があることに気づき、そのそれぞれの構造の違いが衣服の保健衛生的性能をはじめとした種々の性能に影響していることを理解する」というものであった。その中でも、保健衛生的性能は小学校家庭科において中心的に扱われるべき内容である。そこで本年度は、①附属小学校において「家庭科」授業へ参加し、「学び」の内容を確実に把握することと②その「学び」の内容を十分活かした「こどもまつり」の企画を検討し、実施するということにした。

２．学びの企画について

附属小学校における授業実践に関しては、その基本となる被服科学の知識とともに、本学教育学部紀要[3, 4)]に報告した。附属小学校における授業の「衣服を涼しく着よう」と「衣服をあたたかく着よう」に用いた体験的な教材の準備と実際の授業は 3 回生が中心となっておこなった。2 回生は、その授業を参考にして再構成した後、教員養成課程の講義「初等家庭科教育法」を利用して、附属小学校での授業実践として紹介[5)]した。このように、附属小学校における授業実践によって、本活動にける被服科学の学問的な内容をふまえた「学び」についての内容を 2,3 回生が夏休み前に把握したため、その後のイベントの企画を夏休み中に 2 回生が中心となって準備することが出来たと考える。

毎年、大学祭のおよそ 1 週間前の 10 月末に実施される「こどもまつり」への出展という形で計画していたイベントであったが、本年度はこの企画が 10 月中旬の日程となり、準備が間に合わないと考えられたため、大学祭本祭中に開催される「公開体験学習会。」（主催：和歌山大学学生自主創造科学センター、後援：和歌山県教育委員会）における出展に切り替えた。

３．企画の内容

昨年までの出展を参考にして、ものづくりは、昨年度と同様に織物構造を用いたプロミスリングと編物構造を利用したあみぐるみの製作とした。ただし、毛糸の素材を毛 100%のものからアクリル 100%のものへ変更したため、まだ「被服学」の講義を受講していない 1 回生が中心となって、見本となる作品作りを担当した。

学びの企画は、スタンプラリーによるクイズコーナーを 2 回生が中心となって提案し、スクラッチカードを用いた「楽しく学ぶ」クイズコーナーという方針が決定した。教育学部の L101 教室という階段教室を会場として、階段状の椅子と机の周囲の壁面と窓を利用して、合計 6 問のクイズをパネルにわかりやすく掲示した。6 問中の 3 問には、ゆかたやジーンズなどの衣服の構造（織物か、編物か）を答えるクイズを入れ、2 問は、布の構造が吸水性および通気性という布の性能と関連してどのように異なるかを考えるクイズにし、これらの性能は実際に実験する様子を見ることが出来たり、体験したりすることが出来る工夫をしたものとなった。ここでは、前期に実施した附属小学校における授業実践内容が工夫して使われた。残りの 1 問は、布の中に存在する空気に気付くかというものとした。これらのクイズラリーの参考とするため、1,2 回生は万博公園前にある大阪ガスの展示場生活誕生館 DILIPA と国立民族博物館を見学した。クイズの順番は、回答する側の心理を考えて、三者択一の正解番号を考えるという工夫がなされていた。クイズラリーに関する詳細は、別の機会に実践報告としてまとめたいと考える。

４．「公開体験学習会。」における活動

「こどもまつり」への出展から公開体験学習会への出展に変更し、対象者が低年齢層のこどもたちが主であった昨年度と比べ、来場者がどんな年齢層であり、参加者がどの程度あるのか、などわからない点が多くあった中、充分に準備をして当日を迎えることが出来たと思う。

【感想】

今までは、やりっぱなしになっていた部分が多く、肝心の編物・織物についての知識が頭に入らないで終わってしまっていましたが、今年はクイズコーナーが充実し、また、子どもが楽しめるような状況が作れていたのではないかと思います。また、1,2 回生の学生が中心となって、子どもの目を引くようなものを作ってくれていたのですが、とても上手く作っていたのではないかと思います。掲示物は色鮮やかだし、見本の可愛いあみぐるみもたくさんあり、さらに、クイズに景品が付くことで、子ども達のやる気を沸き立たせ、スクラッチ式で楽しめた気がします。友達同士や親子で来てくれていた人が多く、例年よりも年齢が高かった気がします。中学生ぐらいだと、手際もよく、すぐに理解してくれて可愛く作れていました。小さい子どもでも、見本のあみぐるみを見て、「こんなの作る！！」と意気込んで頑張ってくれていた子もいました。季節柄か、見本にあった雪だるまを作りたいといった子が多く、白糸の人気が高くて、2 度作って雪だるまを仕上げていた子もいました。どの子も満足そうに持って帰り、親子ともどもクイズにも積極的でした。中には、私達が説明しなくても、掲示物を見ながら、父親が子どもに対して、編物と織物についての違いなどを丁寧に教えている人もいて、ほぼ完璧な説明だったので、私達の方が焦ってしまうほどでした。今回はクイズコーナーが充実していました。ただ問題を解くのではなくて、実際に生地を手にとって見てみるとか、実験してみるとかなど、体験的なものが盛り込まれるようになり、子ども達も、じっと生地を触って見たり、親と意見を言い合ったりしていました。そして、スタンプや景品といった、子どもを喜ばせるようなものの準備も良かったと思います。スクラッチがうまく削れなかったのは予想外でしたが、クイズを全て考えてもらうように促せていたように感じます。（池本佳織）

今回のクリエは特に２回生が準備の大半をやってくれました。私がこれはどうするの？と質問すると、これをしてください、とてきぱきした答えがかえってきてすばらしいなと感じました。このような中で私が行った準備は、景品であるお菓子を買いにいったことと、スタンプカードを作ったこと、最後に前日の会場の装飾を行なったことです。景品のお菓子選びで、私はできるだけかかるお金を減らそうと、おいしくて値段のかからないものを考えていました。しかし、２回生は、子ども達の気に入ってくれるようなものや、今人気のあるお菓子にしたほうが、喜んでもらえるという考えでした。自分が子どもになって考えてみると、確かに安い物よりもお菓子に載っている絵を見て選ぶと考え直し、２回生の意見に賛成しました。スタンプカードも、子どもが好みそうな色や、手を切らないようになどの配慮がなされていました。部屋の装飾もすごくよかったと感じ

ました。特に１回生の作った編みぐるみは、今まさに子どもがほしいと思うキャラクターの楽園であり、あんな編みぐるみを作りたいと考えて一生懸命に手を動かしていた子、プロミスリングが終わっても、次に編みぐるみを作ろうともう一度、足を運んでくれる親子も見ることができました。中には子どもよりも、親の方が一生懸命になっている姿もちらほら見られました。今回は、小学校低学年だけではなく中学生も多く参加してくれました。ニュースや、中学校で勤務されている先生から、今の中学生は大変と聞いていました。しかし、私たち学生の話を良く聞き、夢中になって作品を作っている姿に心温まりました。今までの話から行くと、良いことばかりあったように感じられますが、改善しなければいけない点も幾つかありした。まず 1 つ目は、決められた時間以外には、参加される人を会場に入れないことです。私たち学生が、一人で何人かに教えていても、途中で人を入れてしまうと、またはじめから説明したり、今まで教えていた方に早く説明しなければならないからです。２つ目は、クイズを強制参加にすることです。今回のクリエはお客さんに楽しんでもらうことが大切ですが、編物と織物の構造もしっかりと学んでもらうことが必要でした。作って楽しいで終わりではなく、なるほどと、構造を利理解できるものにできれば、もっとよいものになると思います。（出水加奈子）

附属小学校での授業を通して、授業に実験やものづくりなどの体験的な活動を加えることの大切さと大変さが分かった。公開体験学習会は、昨年までのこどもまつりの参加とは異なり、全体的に参加者の年齢が上がった。今までは幼稚園やそれ以下の小さなこどもたちと保護者が多かったのに対し、小学生や中学生の参加が多かったように思う。また、クリエの活動を知って見に来て下さった大学関係者の方にもたくさん参加してもらうことができた。他の学部の先生方、一般の方に教育学部の活動を知ってもらう機会が持てたことはとても嬉しく思っている。この自主演習をやっていて、本当に大変なことが多かった。それは同時に、人に物事を教えることの大変さや難しさを表していたのだと思う。その中で、「学び」ということを考える機会を持てたことは良かったと思っている。これからの自分にプラスにできるようにしていきたい。（平田陽子）

今回、私個人として一番に反省すべき点は、準備段階で全くといっていいほど手伝わなかったことです。こどもたちに渡す冊子を見るとひとつひとつが手作りで、こするとクイズの正解が出てきたりと去年のこどもまつりではできなかった工夫がたくさん見られ、感心するとともに今回準備で一番がんばってくれた 1,2 回生の大変さを感じました。また、今回、会場がＬ101 教室ということで広く、レイアウトもかなりうまく考えてくれたなあと感じました。実際にこどもたちが口に紙をあて通気性を確かめる実験を行ったり、吸水性実験が近くで見られたり、こどもたちが目でみて触ってわかる実験を行えたということもよかったのではないかと思います。また、あみぐるみでは、今回毛糸をアクリルに変えてあみぐるみを作りましたが、毛糸より色鮮やかでかわいらしい作品が作れたと感じました。小学生のこどもたちは動物や果物など素晴らしい作品を作り上げて満足そうに帰っていきました。今回は図工としてのものづくりではなく、家庭科としてのものづくりをテーマにしたのだから、今回のクイズを見て回って解くという形式よりも実際に教えながらクイズを出題していくという形のほうがよかったのかなあと思ったりもします。確かに時間の問題も出てきますが、一回の体験学習の時間を長くすることもできるのではないかと思いました。こどもたちにあみぐるみ・プロミスリング作りから何を得てもらうかというところはっきりしていなければ、クイズにつなげるのは難しいことであるし、こどもたちに、ものづくりからクイズに頭を切り替えてもらうことも難しいことだと思います。今回公開体験学習会も半分程しか参加できませんでしたが、ものづくりから学習につなげることの大変さを改めて実感しました。（矢野　梓）

今回は、「昨年のものを発展させて」ということで、夏休みから計画を立ててきました。私は、昨年子どもまつりにて「あみぐるみ・プロミスリング」を行っていたため、作り方や構造はよく分かっていました。問題は、展示方法やどのように客に学んでもらうかです。昨年は、ただ作品を置くだけで終わっていたため、何か物足りなさを感じました。そこで、実際の展示の仕方や工夫を学ぶために夏休みの終わりに大阪万博に行って

きました。いつもは、内容にしか目がいってなかったため気付かなかったのですが、今回、展示の仕方という観点から見学して、参加者を飽きさせず、見やすく感じてもらう工夫がいたるところに施されていました。そこで、この見学で得たことを参考にして、また去年の反省から、参加者が楽しみながら学べるように展示に力をいれていくことにしました。私は主にパネル作りや、ウォークラリーのための問題作り、そして、参加者にわたす手帳や作り方のプリントなどを作りました。他にも、参加者の声をきくために、アンケートも作りました。どれも、対象者を主にこどもとしながらも大人も来ることを考慮して作りました。パネルは絵や写真を入れて、漢字にはルビをふり、硬い文章にならないように何度も何度も模索しました。「ああしたほうがいい、こうすべきではないか」と、考えが次々に出てきたため、あらかじめ考えていたものよりも多くなり、それらをまとめるのに苦労しました。ウォークラリーはスクラッチカード式にして飽きさせず、問題を楽しみながら答えられるようにしました。こどもたちの邪魔にならずに、手元に残るように、手帳にはカラフルなひもを付けました。どんな人でも「わかる」ように、実験を参加者の前で行うことにしたので、見やすさ、正確さをだすために実験を繰り返し行い当日に備えました。買い出しに手間取りましたが、だいたい計画通りに準備を進めていくことができました。当日の私の役割は、あみぐるみの作り方を教えることと、吸水性の実験をみせ、説明することでした。前日の晴れとはうってかわって、当日は朝から雨でした。出だしは、参加者が少なく残念でしたが、ある程度予想をしていたこともあり、緊張を解くのにちょうどよかったです。又、こどもたち一人一人に接しやすく、教えやすかったです。展示もゆっくりみてもらえ、実験ではみんなが、目を丸くして驚いていました。保護者もこどもと一緒に驚いていました。その顔を見て、とても嬉しかったです。パネルに「あみ・おりたろう」というオリジナルのキャラクターがあったためか、こどもが親しみを感じのか、パネルに目をむけてくれました。ちょっとした工夫が功を奏したと思いました。私は、全体的な流れも把握しておかなくてはならなく、注意して教室をまわっていたので、参加者一人一人と話をしたり、表情をみたりすることができました。教え方が慣れてきたからでしょうか。こどもたちに意味が分からず戸惑っていた顔がありませんでした。また、昨年は全然みられなかった表情が見られました。「へぇ」という顔です。これは、特に中学生から保護者にみられました。近づいていくと、「これって〇〇なんですか？」と聞かれました。興味を持ってもらえたことがわかります。昼過ぎから、参加者が増えてきました。時間を区切っておこなっていたため、それに対して、残念ながらクレームがきてしまいました。妥協して、次々と人を入れていったために、収拾がつかなくなり、実験をみせる回数も増やさなくてはならなくなりました。L101 の教室がいっぱいになり、一時は本当に人手が足りないほど忙しくなりました。多くの人に物作りを通して楽しみ、学んでもらえることは嬉しいのですが、教えるのが不十分になってしまっては元も子もありません。もっと段取りをうまく考えることができなかったのか、あらかじめ多くのスタッフを集めることができていればと悔やみました。それでも、私のできる範囲で少しでも発展させて、参加者の学びにつながったと思います。反省をして、改善して、更に発展して、また反省をして。このサイクルがとても大切だと思いました。（河合沙織）

天気は生憎の朝から久しぶりの雨でした。去年こどもまつりで同じようなイベントをしていた時は、朝はほとんど人が来なかったので、どうなるのかな？と思っていました。ところが準備の時間から数人の人がのぞきに来ていて、始まりの時間から割と人が沢山いました。昼ごろを過ぎて、去年より教室が大分広かったにも関わらず、部屋がいっぱいで、しかも材料が足りなくなってしまう位人が沢山来ていました。その頃には、折角役割をしっかりと決めて分担していたのに、あまりの混雑に一部人手が足りなくなってしまって、しっかりと学びの場にできていなかったのではないのかと思うところが少し残念でした。今年も小さな子が一生懸命作品を作っているのが非常に可愛らしく、面白かったです。また連れ添いの親もこども以上に夢中になっていたりしているのが微笑ましかったです。今年は大学祭でのイベントだったので、去年に比べて中学生・高校生が沢山いたのが大きな違いだと思いました。私はカメラを通して衣服を拡大して見せたりもしていたのですが、こどもや学生さんだけでなく、大人の人からも勉強になったというコメントをもらえたりしたのが非常にうれし

かったです。こういうイベントを通して、楽しみながら衣服に興味を持つ人がいるといいなと思いました。イベントを企画したり、誰かに何かを教えたり伝えようとする時には伝えようとする内容以上に色々知っていなくてはいけないこともあるし、準備も沢山いるし、そのために沢山の時間も掛かってとても大変だったけれど、先生を目指す私には勉強になったところも沢山あったように思います。（望月春加）

今回、クリエの活動では、あみぐるみとプロミスリング作りを通して衣生活を考えるという目的で取り組んだ。昨年は子どもまつりで実施したこともあり、幼稚園から小学生くらいのこどもが多かったので、今年の取り組みもこどもに教えるという前提で準備にとりかかった。最終的な目標は、私たちの衣服が布でできており、衣服を着ることが空気をまとうことだと教えることだった。夏休み、民族博物館に見学に行ったときに、スクラッチカードを使った問題があり、おもしろく、自分から学習できるので、編み・織りの問題に応用することにした。スクラッチカードだけだと、問題がこどもの手元に残らないので問題を書いた手のひらサイズの絵本を作り、それと併用してスクラッチカードを使った。昨年は、クイズをその場で言って答える形式だったが、今年は一問一問クイズの書いてある場所にこどもが行って、実際に体験して答えるので、どうやったらうまく実験ができるのか、当日までの準備はとても大変だった。吸水実験とドライヤーを使う通気性の実験が面白く、わかりやすかったので、ぜひこれはこどもに体験してもらいたいと思い試行錯誤して準備した。大学祭当日は、雨が降っていたが、大勢来てくれてうれしかった。しかも、昨年とは参加者の年齢層の幅も広く、教えがいがあった。あみぐるみを教えていると、「牛乳パックでこんなことができるんですか、わぁ、すごい。」と喜んでくれて、うれしかった。こどもというより、主婦の方やお年寄りの女性がとても熱心に作っていることが多かった。中学生も多く、長い時間飾り付けをしていた。後で人数を集計してみたら、「あれ、もっといたのに。」と思ってしまうほどだった。今年、良かった点は大教室でやったため、参加者がゆっくり時間をかけて作業ができたこと。ひとつ気になったのは、時間で参加者数を制限してしまっていたので、作れなかった人もいたことだ。教えるのは簡単だし、いっせいに教えなくても個別に回って教えれば、十分作り方はわかってもらえたので、時間で区切らず、自由に出入りできるようにすればもっといいと思った。今年の活動は、スタンプラリー形式のクイズを取り入れたので、作る楽しさも味わえ、編みと織りについても教えることができ、作る体験だけにとどまらず、良かった。これからもこのような活動のときは、ただ楽しいだけで終わらないよう、教材を工夫していくことが大切だと思った。（山田ゆかり）

今回、私は初めてクリエに参加しました。準備段階から当日の活動、片付けまで大変でしたが、充実感のあるものでした。参加された方たちも楽しそうにされていたと思います。　私が初めて指導にあたったのは、中学生の女の子 2 人組でした。とても緊張して作り方を教えることしかできなくて、どうしよう！と思っていましたが、先輩が指導しているのを見て、真似することからはじめました。次第に緊張がほぐれて、楽しんで応対できるようになりました。一番うれしかったことは、親子で参加されていた方たちが多かったことです。こどもさんと考えながらクイズラリーをまわったり、一緒にあみぐるみやプロミスリングを制作したりしている様子がとても楽しそうで、私はドキドキして自然に笑顔になりました。親子のコミュニケーションはこんなにも暖かく、こころがまぁるくなるものだということを改めて実感しました。しかし、問題点も見えました。「景品をもらうため」にクイズをまわる、「製作すること」だけに夢中になっている参加者がいたことです。私も工夫し、いろいろと声をかけてみたのですが、あまり効果がないようでした。今回のテーマは、楽しみながら学習することであるのに、残念です。学習するという部分には興味が無いようでした。楽しかったという気持ちも確かに大切なものです。しかしそれだけでは次につながるものが生まれません。なんでこれはこうなの？という疑問、これもそれと同じ？という興味関心の芽が生えません。私は、好奇心がこどもたちの未来に役立つものと考えます。だから、ただ楽しかっただけではせっかくの体験がもったいないように感じます。今回の活動の中で、どうすれば学ぶことに対する興味が生まれるのかを考えるきっかけができました。これから学ん

でいくことの中から、また、日々の生活の中から、見つけていきたいです。（曽我部佳奈）

大学祭の時に行われたクリエに向けて、様々な準備をしてきました。私たち１回生はこのような事をやるのが初めてだったので、主に先輩方のサポート役に回りました。参加された方たちが、楽しんで編物と織物の違いについて理解してもらえるように、多くの案を出しました。特に一番大変だったことはあみぐるみ作りです。部屋を飾るという目的だけでなく、あみぐるみ作りをされる方の参考になるようなものを作るために、簡単に作ることができ、尚且つ自分が欲しいと思えるものや可愛いものを考えました。雪だるまやリースなどの季節物や、子どもたちが好きそうなキャラクターや動物などを作りました。基本的な編み方しか教わっていないので、それを応用して作るのは思っていたよりも時間がかかりました。しかし、実際に自分が考えて作っているうちに、完成した時の喜びを覚え、大変な中にも楽しさが出てきて、この面白さや楽しさを参加してくださった人たちにも伝えたいなと思いました。当日は多くの方が参加してくださいました。今までは教わることが多く、あまり自分が教える立場になったことが無かったので、一番最初に教えた時はどのように教えたらいいのかわからなく、少し戸惑いました。また、同時に何人か教えていても人によって作るペースが違うので、何回も説明したりして大変でした。しかし何人も教えていくうちに慣れていきました。最後のほうでは、私の作った雪だるまを参考にして作ってくださった方が多く、三つのグループを同時に教えることもできました。

こどもたちと接してみて、作っている最中の会話の内容には多少困りましたが、説明はしっかりと聞いてくれ、教えたことをすぐに理解してくれたのでとてもやりやすかったです。また、楽しそうに作ってくれていたので、私の伝えたかったことが伝わったように感じ、とても嬉しかったです。私は初め、こどもの目線で教えようと決めていましたが、どうしても上からの目線で見てしまい、実行するのは難しいなと思いました。

今回このような貴重な体験ができて良かったです。先輩たちに比べ、やはり自分はこどもとの接し方がまだまだ下手だなと思いました。これからこういった機会を生かして、もっと自然に接することができるようにしていきたいです。また運営上では、小さい子だと一人でクイズが解けなく、そちらについていくと教える側の人数が減り、人手がもう少し欲しかったです。その他に、編みと織りの違いを本当に理解してくれたのか疑問に思うことがありました。実験はやる人が多かったのですが、掲示物を読まない人も多く、違いについての教え方はもう少し改善が必要なのではないかと思いました。（高橋美帆）

５．今後の課題

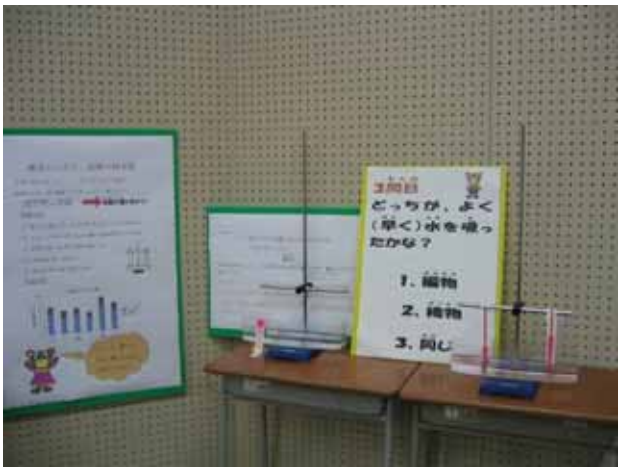
今年度の企画は、前期に附属小学校における実践を実施したおかげで、家庭科における体験的・実践的な授業とそれに必要となる学問的内容を理解した上で、クリエの公開体験学習会へとつなぐことが出来たと考える。しかし、少人数の家庭科専攻生だけで企画段階からすべてを計画して準備していくために、一部の学生に過剰な負担がかかったことは事実である。イベント当日は、ボランティアで手伝いをしてくれた学生がいたが、それでもものづくりの指導とクイズのデモンストレーションをするということは大変だったようだ。企画者の人数規模にあったイベントの企画が必要である。

最後に、公開体験学習会当日にボランティアで参加してくださった横浦那美さん、藤田有里さん、永さこ俊哉さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

注）

1) 木戸奈保子他（2004）和大祭「こどもまつり」における「学びの企画」出展　毛糸で作ろう、プロミスリング、クリスマスリース、和歌山大学教育学部学芸、50、89－102
2) 光岡良恵他（2005）衣生活に関連したものづくりを通した「学び」　－プロミスリングとあみぐるみの製作から－、和歌山大学教育学部学芸、51、101－115
3) 今村律子他（2006）小学校家庭科衣生活領域における「着方」学習に関する研究　第 1 報　－被服科学の立場から－、和歌山大学教育学部紀要　教育科学編、56、135-141
4) 藤原ゆうこ他（2006）小学校家庭科衣生活領域における「着方」学習に関する研究　第 2 報　－附属小学校における授業を通して－、和歌山大学教育学部紀要　教育科学編、56、143-149
5) 赤松純子他（2006）小学校家庭科衣生活領域における「着方」学習に関する研究　第 3 報　－和歌山大学における授業を通して－、和歌山大学教育学部紀要　教育科学編、56、151-158

布の構造
編んだ布（編物）
織った布（織物）
物質
たて糸とよこ糸が直角に交差しているもの。
例
体操服、Tシャツ
着物、スーツ


どっちが、よく（早く）水を吸ったかな？
1. 編物
2. 織物
3. 同じ